

受付番号

## 留学・研究計画書

氏名 宇田川彩	留学機関名 国立 ブエノスアイレス大学
留学先国名 アルゼンチン	留学期間 西暦 2011年1月～2012年12月
研究テーマ アルゼンチン都市部ユダヤ人の移動と生：越境と家族・個人・歴史	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>本テーマの「越境」には、二つの意味合いが込められている。一つは、国境を越えた空間の「移動」という意味である。移動を通し、個人や集団と新たなローカリティとの関係が形成されていく現象は、現代世界において普遍的かつ新たな生の形態として定着しつつある。ユダヤ人は、全世界にコミュニティを持ち、歴史を通じて越境的な生を営んできた、現代に先駆的な集団である。もう一つは、認識上の境界を越える、人と人との「関係性」における越境である。この点について本研究では、ユダヤ人と非ユダヤ人とのあいだの結婚(通婚)によって形成される家庭に注目している。</p> <p>本研究は、アルゼンチン都市部に生きるユダヤ人の個人誌と、家庭に関する微視的な人類学的調査を通して、越境の時代における多様なつながりの可能性を、現代社会に提示するものである。申請者の関心の根本には、マイノリティであるか否かを問わず、他者との関わり合いの中で自己認識と他者認識がどのように生成していくかを追うことにある。注目するポイントは①個人②家庭③都市④国家という4点に集約される。通時的な観点から述べれば、移動を伴う個人史および家族史を、アルゼンチンという移民国家のブエノスアイレスという都市に位置づける作業を行うことになる。とりわけ家庭に注目し、上記の二つの意味での「越境」を経験してきた家庭において、「ユダヤ人」であることとは何かを問う。</p> <p>具体的には、通婚によって形成された家庭でのインタビューおよび、日常生活や行事(ユダヤ暦/キリスト教行事)の観察を通し、日常的に構成される関係性について考察する。家庭を空間ネットワークの一つとしてとらえれば、通婚を通じた関係性の構築は、友人関係や他の社交関係にもつながりを得いくため、家庭だけでなく、学校や社交スポーツクラブ等にも調査対象を広げ、総体的な理解を目指す。</p> <p>19世紀以来の移民の子孫から成り立つ移民国家という、ラテンアメリカにおいても独自の存在であるアルゼンチンでの研究は、国際的な移動がもたらす多文化状況に参照すべき点を多くもたらすだろう。本研究は、「先住民」でも、「白人」でもないマイノリティから照射された新たな視点を通し、アルゼンチンという国さらにはラテンアメリカという地域を理解する試みでもある。大都市ブエノスアイレスにおいては、エスニシティや宗教の「多様性」に価値が置かれる。こうした多様性に基づいた都市や国家形成がどのようになされているのかを問うことも、本研究独自の視点によって可能になる。</p> <p>本研究は、変わりゆく状況に対していかに対応しうるかの提言を国際化する世界に生きる現代日本のわれわれ自身にも示す。「ユダヤ人」自身が、現在ではユダヤ文化・アルゼンチン文化・グローバル文化(日本のアニメや漫画でさえもその一端である)がモザイク状になった生活を営んでいるし、われわれもまた同様である。こうした状況下においてアルゼンチンのユダヤ人は、地球の裏側の他者ではなく、近い存在として自らを逆照射する存在としてとらえられるのである。</p>	

# 成果報告書

記入日 2013年 3月 20日

氏名 宇田川彩	留学先国名 アルゼンチン	所属機関 東京大学総合文化研究科
研究テーマ：アルゼンチン都市部ユダヤ人の移動と生—越境と家族・個人・歴史—		
留学期間：2011年 2月～2013年 2月		
<p>2年間にわたり、2世帯の家族と2人の友人、合わせて4世帯のユダヤ家庭とともに生活を送ってきた。住まいもブエノスアイレスの高級住宅街（外見からは分からないがユダヤ家庭が多い）から、真っ黒の衣装に身を包んだ正統派ユダヤ人が古くから多い界限（現在ではアフリカ、中国、韓国からの新移民も多く無国籍状態を呈している）までに暮らした。こうして暮らしをともにしている内に、一年目は「研究者として観察」していたユダヤ暦（時間のサイクル）を、二年目には「生きている」という感覚を持つようになってくる。とはいえ、大都市ブエノスアイレスにおいて、「ユダヤ人」は何も隔絶された独自の生活を送っているわけではない。むしろ、生活スタイルはアルゼンチン人の社会経済階層に即したものであり、過越しの祭り、ユダヤ新年、贖罪日などはむしろ一年の中で自らのアイデンティティを思い起こす数少ない契機であると言ってよく、このこと自体が重要な研究テーマとなっていた。</p> <p>そうした中、インタビューやライフストーリーの聞き取りを重ねる内に関心を持つに至ったのは、「探究 búsqueda」という言葉だった。個人が精神的探求を重ねていく姿は、ある時は自らの出自（家族）への回帰という形を、別の場合には遠心的で飛び石のようにユダヤ教に限らないさまざまなコミュニティを渡り歩くという形をとる。それは、つねに人々が話題にしてやまないアルゼンチン社会の持つ不安定さと、変化を求める／求めざるを得ない心性と共鳴しているように見える。</p> <p>この傾向が興味深く見られたのは、2011年5月から2012年5月までを中心に参与観察を行った Ohel Moed というグループである。ラビ（ユダヤ教指導者）B が率いる当グループの活動は、隔週金曜の安息日礼拝および隔週木曜のカバラ（ユダヤ神秘主義）のクラス、年3、4回の1週間程度にわたるコルドバ（ブエノスアイレスから700km内陸）山中における合宿が主である。約30~40人ほどのメンバーの内、ユダヤ人（この場合の定義は「ユダヤ人と自己認識する人」）は約半数にとどまるため、このグループを「ユダヤコミュニティ」と呼ぶかどうかは今後検討しなければならない重要なテーマだが、現状ではユダヤ教のシンボル体系を使用した学習集団として分析することを考えている。メンバーの特徴は、すでに複数の別のグループや活動に参加してつねに「探究」を続けており、2009年頃から活動を開始した当グループと出会いをこの探究のプロセスに位置づけている点である。当集団におけるテキストの使用（尊重しながらも、知識やテキストを排した直接的な超越性との交信を目指す）はユダヤ教の神秘主義の文脈からも考察可能であると考えており、2012年9月の贖罪日周辺に、前年度作成された贖罪日のためのテキスト（マフゾル）を捨てるという象徴的な出来事を中心に分析することを目指している。また、当集団のラビをより一般的な宗教的職能者として分析した成果はゲスト講義という形で発表された（於相模女子大学、2012年1月）。</p> <p>以上のラビBの無党的グループでは、私が観察を続けた期間だけでも、メンバーの入れ替わりや活動内容の変化が見られ、学習集団としては安定的ではない（「今、ここ」の重要さがしばしば強調される）。対照的な組織として、2011年7月から11月に調査を行ったユダヤ機関、セミナリオ・ラビニコが挙げられる。1960年代に米合衆国から移入されたユダヤ教&lt;保守派&gt;は、このセミナリオでのラビ養成や教育プログラムを通じ、以降のアルゼンチンのユダヤコミュニティの主流を形成した。アルゼンチンでは</p>		

ほぼ唯一の改宗プログラムを有する当組織での研究当初の目的は、改宗（ユダヤ人になること）という過渡期に着目し「探究」の一つと位置づけることで、自己の変化に対して思い浮かべているイメージや知識、またその実践の変化を見て取ることにあった。しかし、次第にわかったのは、改宗に至る何らかの契機（ユダヤ人との結婚、内面的な追求の結果）があるとしても、改宗自体が急激な変化とは捉えられていないことであった。インタビューの結果からは、改宗自体も人生全体における学習プロセスの一部として捉えられていることがわかった。以上二つのグループを比較すると、セミナリオにおけるユダヤ教への正統的な加入（改宗）と、Ohe! Moedにおける非正統的で境界の不明な接近（改宗を必要としない）の二種類の類型を見て取ることができる。この調査については、エスニック・マイノリティ研究会（2012年1月）にて報告した。

以上の経過からは、ユダヤ人であることを一生続く探究の過程としてとらえるという視点を得た上、アルゼンチンというモザイク状の文化を有する移民国家において、ユダヤ教の知識自体が学習の場を構築する契機となることを認識した。ここで付け加えるならば、ブエノスアイレスは文化・芸術・教育に対する関心の高い都市である。もちろん社会経済的階級による差を念頭に置く必要があるが、文化的イベント（講演、ブックフェア等）の多さや、知的生産への関心の高さは注目に値する。こうした中、ユダヤ教の伝統において非常に重要とされている「学習」はもうひとつの大きなテーマである。2012年7月から2013年1月まで、保守派のシナゴークPで毎週土曜の安息日礼拝前に行われるトーラー（モーセ五書）クラスに通うとともに、クラスのメンバーへのインタビューを行った。週毎に読む箇所（パラシャ）が決められ、一年間でトーラーを通読するこのシステムは、中世ユダヤ教から続く伝統であり、サイクルの終わり（申命記の末尾）は、シムハット・トーラー（トーラーの歓喜）という祝いの儀式で締めくくられ、創世記の初めから再び新しいサイクルに入る。年間を通じた学習のサイクルは、それぞれの個人史を交えたテキスト解釈とともに「織り、再び織っていく」（あるインタビュー中の言葉）ことで作られる。

また、以上の様な組織における研究と関連させながらも別個のプロジェクトとして、ライフヒストリーや家族史の収集を多く行った。冒頭から繰り返している通り、ユダヤ人としてのアイデンティティは日常生活スタイルには即していない。「ユダヤ人」としてのアイデンティティを「ユダヤ教」の宗教実践には見出さず、現地の言葉で「文化」や「伝統」に見出す人が大半であるという統計調査（Erdei&Jmelnizky 2003）があり、私自身も少なからず調査中耳にした。この表現については、現地の人類学的、歴史的研究において少なからず当然視されているという印象を受けており、実際のライフヒストリーの中でどのように語られるのかを通して、「文化」や「伝統」をめぐる文化人類学の論議に位置づけることを考えている。

以上の研究から、暫定的であるが「自己アーカイブ化」という概念を想定し検討していく。この概念は、自己の探求・学習が、共通のテキストや、学習の場の共有を通して集団のアイデンティティを構成していくというプロセスを追究するための分析概念として提示される。多くはユーモアを交えて語られる「ユダヤ人らしさ」のいくつかが質問の多さや機智に富んだ冗談、読書や語学好きに帰せられることは興味深い。「自己アーカイブ化」とは、家族史、個人史、ユダヤ暦、ユダヤ暦を通して想起されるユダヤの歴史といったいくつもの異なる時間の層をイメージしながら、個人的・集団的に生成、再生産、呈示、可視化（出版や情報公開を含め）までを射程に含み、さらには他の学習集団や他地域にも展開を目指すものである。ここから、テキストをめぐる人類学という形への発展が考えられる。

今後の諸論文・博士論文の執筆にあたっては、「民族誌を書く」とことについても考察を深めたいと思っている。私自身がユダヤ教コミュニティに深くコミットしていったと同時に、観察者や人類学者としてではなく、ともに勉強をする仲間であり、つねに同じ方向を向いているという感覚があった。フィールドワークの終盤に、「あなたと一緒に私もユダヤ教に戻っていった」という感慨をある女性に告白されるなど、フィールドでの調査者自身への影響、さらに私自身が周囲にもたらした影響を見過ごすことはできない。2012年10月にはユダヤ慈善団体であるAFIP、2013年1月にはアルゼンチンを代表するユダヤ団体であるAMIAそれぞれの文化活動に招聘され、ユダヤ教や日本の宗教についての講演を行った。またAMIAの広報キャンペーン「100万回のAMIA」に参加を要請されたり、民間のラジオ番組「宗教と人」に出演したりと、私自身も「自己アーカイブ化」の一端にいたとも言うことができるかもしれない。